

## 評書

板垣直子 著

## 『夏目漱石——伝記と文学』

太田 三郎

## 一

夏目漱石に関する研究書はまさに汗牛充棟というべきほどである。このことは漱石の文学が日本の近代文学のなかで重い意義をもつことを示すし、同時に読者がひろく且つ深く存在することを反映している。しかし数多い研究書とはいえ、専門家には研究の指針となりあわせて一般読者には漱石文学の一層の理解の助けとなるようなものは必ずしも多くはない。専門家向きの特種研究はそれぞれ尊重されるべきだが、一般読者には不向きことが多い。研究書は専門家向きというのが、漱石にかぎらず、作家研究書の通例である。漱石のように広汎な読者をもつ作家の場合には従来の研究書とはちがったもの、即ち専門家だけでなく一般読者にも役立つ研究書がとくに望まれる。この願いを果す意味で板垣直子氏「夏目漱石——伝記と文学」は漱石研究書に新たに加わる資格をもつものといえる。

本書は副題の示すように評伝と作品研究の両面から作家漱石の生涯と作品解説とを扱っている。一般に作家の評伝といえ、作家の家系、生涯の数々の経歴をのべ、これらから作品の経緯や作品の内容を解釈しようとする。これは正しい態度といえるが、家系や家族環境に関心をよせるあまり、作家としての漱石に直接関係のないことまで細かくのべ、時に煩に堪えがたいことがある。

る。作家の生成と作品の創作に関係あるものならいかに詳細な事柄といえど評伝中に取扱われるべきだが、その限界を逸脱する例がよくある。生涯の体験のうち作家的発展に関係深いものと判断するには作品に対する深い考察が必要である。特に異性関係は世人の興味をよぶし、作品と結びつけられがちである。しかし一つの恋愛がある作品と相当程度関係しうるにしても、直接そのまま作品化されるわけではない。様々に変形して作品中にあらわれてくるのが普通である。ときには反対の表現ともなりうる。作家の体験を取扱うときは慎重を要する。

## 二

本書は第一部を伝記とし、「漱石伝記の特色について」と附記されている。ここに著者の態度の特徴がみられる。伝記は四四八頁に及ぶ本書の過半の頁を占めるが、それは三十五の章にわけられている。出生、家系、家族の記録から始めて遺体解剖所見に終る。この間、「はしがき」の中にのべられているように、社会的政治的変動と生活環境、交友関係とその感化、家庭生活の及ぼした影響、が扱われてゆく。このとき著者は、作家として生長してゆく漱石を、また作品とのかかわりを、中心にすえて漱石の環境と体験をえらんでゆく。それ故伝記は散漫に陥らず、簡潔ときに精細、著者の漱石文学理解を軸として集約

整理されている。その結果、人間漱石の姿をうかがいあがせるとともに作家漱石の活動を表裏の関係で描いてゆく。この点が特色となり、研究家には示唆となり、一般読者には興味ぶかいものとなった。

伝記の中で著者はとくに次のことを指摘している。——漱石の生母のちえについては通説を否定し、遊女屋伊豆橋の娘だとする。そして金之助が幼女の頃から里子、養子として数奇な運命をたどったあとを詳しく記しその環境が作品にいかんにか反映したかを示す。漱石が生母に懐しい気持を抱きつづけたと著者は記しているが、これは漱石文学を理解する上に重要な鍵となるものであろう。

漱石が正則の中学校に通ったこと、また二松学舎で漢文をまなんだことは、英文学者漱石の蔭にかくれてとかく軽くみられがちだが、漱石文学を理解する上に重要な点である。漢文学で文学的感覚をえていたため英文学という異質の文学に出会ったとき漱石は文学そのものを根本的に考え直さざるをえなかった。英文学のみで文学的素養をえたものとは違った苦しみであらうが、同時に二つの文学の質的相違を悟れば、文学へ一層深い理解をうることができよう。

漱石はこの体験をへていた。著者が中学時代漢文を愛した漱石に注目しているのは正しい。さらに中学から予備門時代にえた友人との関係を著者は重視している。この時代にえた友人は、一生の友となりうるもの。これらの友人が作家漱石の精神形成に寄与した点について、四、五章に始まりその後随時著者は眼を配っている。たとえば菅虎雄、米山保三郎、正岡子規、大塚保治、中村是公ら。

教職についてからの漱石の経済的苦しみ、生家、養家の人々への経済的援助、またわずらわしい係累が若い漱石をいかに苦しめていたか、そのことが作家漱石形成にいかなる関係をもつのか、著者はのべてゆく。結婚後の漱石が妻鏡子によってどれほど精神的に苦しめられていたか、著者はくどいほどに事実をいくつもあげて説明しようとする。漱石がこれほど家庭生活に苦しんでいた

のかと読者は同情させられることだろう。

漱石が精神異常であったとする最近の精神病学者や一部評論家の説に対して著者は、いわゆる精神異常と創作と、鏡子の妊娠とその業病と、その時期的関連性を指摘し、安易な精神異常説を否定している。とくに作品中に描かれたものの、例えば「行人」の一郎の神経衰弱、をそのまま漱石の異常の証拠としたり、鏡子「漱石の思出」にのべられた点を拠り所とする精神異常説は力をこめて否定されている。鏡子は夫の学究生活と作家活動に無理解であり、その愚劣さと無教養さとが漱石の神経を苦しめたのだと強調している。漱石死後の未亡人と遺児の生活態度や漱石批評をみると、著者の見解に真理ありと読者は思わざるをえないだろう。

大塚楠緒子・磯田多佳女とが漱石の恋人であったという説に著者は強く反対する。いずれにも著者としての論拠を明らかにしている。とくに大塚楠緒子については、その夫君、大塚保治の講義を直接聴いた著者としては不当な論議に堪えられないのだろう。三兄の妻登世を漱石が恋していたという説もあり、漱石に何とかして愛人を設定しようとする論者に対して、瓜実顔の、眼医者で見めた娘こそ漱石の心に一生残っていた女性だとする。漱石は「虞美人草」の小夜子の系列の女性を好んでいたと思える。友人の妻に対する熱愛や嫂への親愛の情を作品が描いているからといって、それに応じた体験を必要とするわけではない。創作の心理は複雑である。今後明白な証拠がないかぎり、漱石の愛人に関する論議は憶測の域にとどまることだろう。

木曜会に集った人々のうち芥川の漱石批評——不機嫌なときの「老弁無双」や他人に対する「猛然傲然」——に注目したり、坪内逍遙のシエクスピア翻訳に対して漱石が批判した言葉を引用したりしているところに、著者の独自の見識がみいだされる。成は朝日新聞社の先輩にあたる二葉亭四迷の死に際して漱石のとった態度や書き残した文章をあげて、漱石の誠実に著者は注目する。

「煤煙」事件を起した森田草平を漱石がいかにかばったか、そして再起の道を与えながらも作家としては忌憚ない批判をしたか、ここに漱石の人情味と厳しさがみられるという。

要するに伝記の部分は著者が、漱石の環境と生涯とを、作家漱石の形成されてゆく条件と過程として分析説明したものである。「漱石伝記の特色について」の附記はこういう意味なのであろう。そこに批評家としての著者の鋭い感覚をよみとることができる。

### 三

第二部文学作品、は「吾輩は猫である」に始まって「明暗」に至るまで二十二篇をとりあげる。この第二部の特色の一つは十三の作品について比較文学的考察が加えられている点である。著者はこの考察の中で、各作品と背景になった外国作品との関係を説明している。英文学者として出発した漱石は文学理論を自から作りあげた。それは文学とは何か、を問うもので、文学の学究としては根本問題である。それは文学の形式と内容、社会的存在の様態にわたる。同時に創作の手法、心理にも及ぶ。ここに作家漱石が生れてくる契機があった。著者は伝記の中でこの間の経緯を随時指摘し、説明してきている。この点に関連して外国文学との関係が重視されているわけである。漱石は外国文学を模倣したにすぎぬというような説は論外とするにしても、日本の近代文学の発達は外国文学と関係が深い。その関係をいかに解釈するかが問題である。「彼岸過迄」はステイヴンソンの「自殺クラブ」の構成法、探偵小説風構想、猟奇性を模している。しかし漱石はステイヴンソンによりながらも、恋する青年の苦悩と不安と嫉妬の混り合った心理を描こうとした。著者は以上のようにのべ、しかもこの心理は漱石自身の特異な性格を介した心理であるとする。そして「彼岸過迄」に心理描写を完成してゆく漱石文学の第一歩としての意義を著者は認め

ている。それぞれの作品に、これに類した解説と指摘とを加えることによって著者は日本近代文学と外国文学との関係を具体的に示し、かつ一方では、漱石が外国文学をいかに摂取し、自己の文学を完成していったかを明らかにしようとしている。研究家はそこに問題点を発見したり、疑問を多く鍵を見出しうるであらう。また読者は創作というものの性格を理解することだろう。一般の漱石文学入門書と違った味わいと意義がここに認められる。

「行人」は「こうじん」とよむのか否か、が問題になる。漱石は「こうじん」とよんでいたという。「ぎょうにん」ともしよめば違った意味をもってくる。「明暗」は「めいあん」であり「みょうあん」でなく、禪家の用いる「明暗双」からとられたものと著者は明らかにしている。こういうことはうっかりしがちであるが、著者は作品の内容の解釈に関することとして見逃がしていない。或は、「行人」の最後に描かれたところ、即ち、紅ヶ谷の別荘でのこと、一郎が薄の根元にいる蟹に見とれているのをみて、Hが苦しくはあるまいと言った個所をあげ、自己と対象がびったり合一する境地を漱石はえがき、「即天去私」の理念を解する手がかりを示している、と著者はいう。これも作品を細かくよみこなしてゆく者にこそ指摘しうるところであって、著者の批評家的な鋭さのなすわざであらう。

漱石の作品に対する解説書はいくちもあるが、本書第二部の特徴は全作品についてその内容をまず記した上で評伝上の事実との関連を示し、時に外国文学との関係を論ずる点にある。たとえば「道草」における養父、義父との実際の関係、妻鏡子の妊娠と業病など。さらに漱石文学の発展上においてその作品が占める地位と意義―さきあげた「彼岸過迄」と心理描写との関係の如く―を論ずる。かくて、個々の作品が漱石文学全体の中でもつ有機的な関連性が示されている。それ故これら作品群の解説をよむと漱石文学の全貌が理解されてくる。また漱石文学研究上の問題点も判明してくる。

著者が「漱石を総合的に取扱ってみたい」「総合的とは視点を限定しないで、伝記と作品の総体から観察することだが、比較文学の問題もむろん入る」と「はしがき」に記しているところは、本書において達成されていると言うべきであろう。研究家にも一般読者にも示唆をあたえ、かつ興味ぶかい研究書として、本書の刊行を喜びたい。

(千葉大学教授・文学博士)

『夏目漱石―伝記と文学』

(B 6 版・四四八頁・千五百円・至文堂刊)